

彼の創製した処方はその後の医家に広く受けつがれていった。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所)

内藤希哲の医説

丸山 敏 秋

江戸時代中期に台頭した古方派の医学は、吉益東洞の出現によって一つの極点を迎え、日本漢方界の一大勢力となって浸透した。その東洞より一年早い元祿十四年(一七〇一)に生まれ、東洞とは全く異なる独自の医学体系を構築したのが内藤希哲である。わずか三十五歳で世を去った希哲の名は富士川『日本医学史』にすら見えず、最近までほとんど注目を浴びることなく埋もれていた。「五経一貫」を旨とした希哲の医説は、医史学的にも臨床的にも極めて興味深い。今回は主著『医経解感論』を通して彼の医説の特色を闡明にし、その医史学的な位置づけを考えてみたい。

希哲の医学に臨む基本姿勢は、「五経一貫」に尽きる。信州松本に生まれ早くに医を志した彼は、『万病回春』の著者龔雲林(延賢)の医説より惑いが始まり、種々の遍歴

を重ねた末に、仲景書が医説の総括であることを知る。仲景書を熟読・書写し、その方を親試して、遂に「一貫の旨」を会得。さらに清本の『金匱玉函経』を読んで、仲景の三経はただ一書のみと悟り、『金匱玉函経類編』を編纂。その大要を示すものとして『医経解惑論』三巻を著わした。

希哲によれば、従来「五経」とは『素問』『靈枢』『難経』『金匱要略』『甲乙経』の五部を指す。だがそれだけでは不充分と考える彼は『神農本草経』『明堂経』『内経(素・靈)』『難経』『金匱玉函経(傷・色)』を儒家の六経に比すべき医家の「五経」と見た。それら「五経」は『内経』を宗とし、仲景書を総括とするものであり、仲景はあたかも孔子に匹敵する医の大成者であるという。

世に伝わる仲景書について、彼はこう考えた。『傷寒論』『金匱要略』『金匱玉函経』はもともと一つであり、原名は『傷寒雜病論』、『金匱玉函経』とは後人の尊称である。『金匱要略』は本書の末の六卷に当たるが、その臟腑経絡先後篇のみは、開卷第一篇「総論」の脱簡である、と。このように仲景書を認識した上で、希哲は仲景作書の意図を明らかにした。要するに『傷寒雜病論』は、総論・平脈・弁脈

に始まり、六経病を經とし、六氣の病(中風・温病・中喝・中湿・瘧病・傷寒)を緯として總合化が図られた一大医学古典であるという。そしてその原型は『素問』熱論篇と『難経』五十八難に求められる。このような見方から、彼は『金匱玉函経類編』を著わした。

仲景書に疾病の発生がことさらに述べられていないのは、『内経』に既に詳述されているからである。こう考える希哲は、すぐれて『内経』的な病因觀を披瀝している。すなわち、疾病は内傷と外感(外邪の感応)によって生ずる。後者は前者があつて起こるゆえ、前者が眞の病因である。邪の客する所は表・裏・半表半裏・上・下のいずれかであり、異常は虚・実・寒・熱として捉えられる。従つて治療は、汗・吐・下・和・滲・補・瀉・温・冷の九法を原則とし、さらに正治と反治の二法を加えた域を出ない。これら病因から治法に至る考え方は、『内経』から仲景書に至るまで一貫したものであるという。

以上が希哲の医説の基本的な考え方である。「五経一貫」を旨とする彼は、たとえば東洞のように病因を不可知として退けたり、臟腑や経絡を無視したり、陰陽五行論を批判

したりはしない。多くの日本の医家が排斥した運氣論ですら、消極的ではあるが受容している。

かかる医説を展開した希哲を、日本の医学史上に位置づけることは、現在のところなかなか難しい。従来、江戸時代の医学の流れは、古方派・後世方派・折衷派あるいは考証(学)派に大別されているが、これらはおおよその傾向を示したものにすぎない。強いてその枠組を用いれば、仲景を至高と尊ぶ希哲は広い意味で古方派に属されよう。

だが、運氣論を否定排斥せず、臨床的に有効であれば金元医学の方も積極的に摂取しようとする姿勢があることを見れば、古方派とは明らかに性格を異にする。あるいは彼を折衷派と見なすこともできようが、折衷派という概念はあまりにも曖昧にすぎる。いまだ熟した見方ではないが、法を古に求めることを旨とし、方を古今にわたって広く採る「古法派」という枠組を設ければ、希哲を一応それに属せしめることはできよう。

総じて、中国伝統医学を習得する場合、『傷寒論』のみを金科玉条とする古方派の姿勢は、医史学的に見て特異・異端と言わねばならない。他方、「五経一貫」を主張する

希哲の姿勢は現在の中医学にも共通した極めてオーソドックスなものである。折衷派などという曖昧な概念ではなしに、希哲およびそれに類似した傾向を有する他の医家群を正當に位置づけることは、今後の重要な課題とされねばならない。

(筑波大学大学院哲学思想研究科)